

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K18490

研究課題名(和文)クロス・ディシプリナリー学としての「庭園芸術学」の構築

研究課題名(英文)Construction of "the Science of Garden Art" as a cross-disciplinary study

研究代表者

後藤 文子(Goto, Fumiko)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：00280529

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀初頭のドイツで「自然庭園」を主導した多年生植物栽培家・造園家カール・フェルスター(1874-1970)と、彼と親密な交流のあった建築家ペーター・ベーレンス(1868-1940)の活動を中核とし、庭園芸術研究の新たな領域たる「庭園芸術学 Gartenkunstwissenschaft」の基礎づけに成功した。具体的には、第一にフェルスターによるゲーテ荘園の庭修復(1948/49年)における植栽デザイン特性、第二にベーレンスの造園活動と庭園芸術理論が19世紀末の近代芸術学を基盤とする事実、第三に「自然庭園」を介して庭園芸術学が20世紀モダニズムに接続する事象、以上三つのアスペクトを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代の庭園芸術が重視した生命的で動態的な自然的環境としての特性を、植物学、園芸学、庭園史学等とのクロス・ディシプリナリーな接合の位相において検討することで、芸術研究の新たな領域である「庭園芸術学」の可能性を実証的に基礎づけたことに最重要な意義がある。それによって初めて開拓し得たのが、20世紀初頭の庭園芸術理論を介して19世紀の近代芸術学を改革庭園における園芸・造園活動に媒介する視座である。そこで獲得した歴史的知見を最新のデジタル人文学に接合する必然性と可能性の検討に着手し、将来、庭園芸術学に基づき近代の庭園文化財を3D動画像等最新メディア化して公開し、社会・文化に寄与することを展望している。

研究成果の概要(英文)：With the activities of Karl Foerster (1874-1970), a perennial plant cultivator and landscape architect who led the "nature garden" in Germany at the beginning of the 20th century, and Peter Behrens (1868-1940), an architect with whom he had a close relationship, as the core of my research, I succeeded in laying the foundation for the proposal of "the science of garden art" as a new field of garden art research through a cross-disciplinary research approach. For this purpose, the following procedures were used: clarification of the characteristics of planting design in the restoration of the garden of Goethe's vineyard house in Weimar (1948/49) by Foerster, demonstration of the fact that the landscaping activity and the theory of garden art by Behrens were based on the modern science of art at the end of the 19th century, and elucidating the connection of "science of garden art" to 20th century modernism through a focus on the development of the "nature garden".

研究分野：西洋美術史(ドイツ近代美術)

キーワード：庭園芸術学 芸術学 近代建築論における空間概念論 空間-時間的空間形成 改革庭園 ドイツ近代園芸と造園 庭園の植物利用

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

西洋における近代芸術は、その本質的な制作論の水準で、人間の身体感覚や内的感情といった可変的な「動態性」を重視した。そのような近代芸術を研究する上で、庭園は、きわめて生命的で自然環境的な場として近代芸術との相関性を有している。しかしながら従来の西洋美術史研究は、概して、「庭園という主題」をあくまでも19世紀末以来の伝統的な美術史研究の体系のもとで「庭園芸術 *Gartenkunst*」概念をもって建築の下位概念に位置づけ、その方法論的な範疇で議論し、記述してきた。必然的にそれら従来の研究アプローチは、庭園を構成する最重要な要素である「生命体=植物」それ自体、つまりそれ特有な性質としての「動態性」への視点と議論を欠いてきたと言わざるを得ない。

1980年代末以降、植物学、園芸学、造園学、環境デザイン学等を横断するドイツの研究者らは、伝統的な美術史的庭園研究には庭園を構成する植物それ自体への視点が決定的に欠落している事態を批判的に反省し、むしろ生物学的な見地からほかならぬ植物を主役として庭園史的記述を再構築する必要性を強く主張してきた (Wimmer, *Geschichte der Gartentheorie*, 1989)。そのためにも彼らは、「植物利用 *Pflanzenverwendung*」の基本原則と植栽の実態に適った歴史記述を新たに模索し、庭園研究独自の時代区分概念を国際水準で定着させてきた経緯がある。申請者の立場は一連のこの研究動向を積極的に支持するものである。一方、研究を主導する Wimmer らとの緊密な学術交流を通して明確に認識された事態は、ドイツにおいてなお、一連の研究を美術史研究の視座から展開させる研究者の不在であった。西洋近代の自律的な造形表現が制作論の水準で動態性を本質とみなした事実を踏まえ、現状を開拓する意義はきわめて大きいとの認識の上に立ち、科研費基盤研究 C[課題番号 25370135] (平成 25-27 年度) を通して本研究の発想を培うとともに、主に以下の検討に取り組むなかで具体的な研究構想を準備した：後藤文子「近代芸術と共感覚」『共感覚から見えるもの』2016, 125-151；同「近代園芸学とオストヴァルト色彩論」『美学』248, 2016, 61-72；同「植物から近代庭園を問う：「庭園史的記述の再構築」をめぐる試論」『慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要』24, 2017, 112-119；Goto Fumiko, *Ostwalds Farbenlehre und die Farben von Pflanzen. Über Farbentafeln im Gartenbau*, *Mitteilungen der Wilhelm-Ostwald-Gesellschaft*, Dezember 2017.

2. 研究の目的

上述の背景のもと、本研究は、近代芸術の制作論の水準における「動態性」問題を重視する立場から、伝統的な芸術研究の体系的枠組みを反省的に捉え、「芸術から植物」を眼差す従来のベクトルを「植物から芸術へ」と転回させ、徹底して「制作論 *Poietik*」を問う。それにより、美術史学と生物学的関心を基盤とする諸学(植物学・園芸学・造園学・自然環境デザイン学・環境生態学等)の協働によるクロス・ディシプリナリー学としての「庭園芸術学 *Gartenkunst-wissenschaft*」の構築を目指した。

美術史学と生物学関連諸学という異なるディシプリンを「生命体=植物」という位相でクロス(協働)させるクロス・ディシプリナリー学としての「庭園芸術学」には、以下の意義と成果が期待された。第一に、芸術研究が寄与する意義として、生物学関連諸学のドイツ研究者が1980年代以降、庭園史的記述の再構築に向けて取り組んできた研究動向において今日まで欠落しつつ

けてきた近代芸術研究の専門的視座を補完し、そこでの取り組みをさらに協働的に前進させることである。第二に、「庭園芸術学」は、生物学的観点から捉える庭園との相関性ゆえに、近代芸術における「本質的位相=動態性」の解明にとって新たな道を拓く、との期待であった。具体的に展望されたのは、絵画や建築等、造形芸術制作の傍ら自ら植物学の知識を習得して熱心に植物栽培に従事した近代画家モネ、カイユボット、ノルデ、リーバーマン、ヘッヒ、建築家オルブリヒ、ベーレンスら多くの重要な近代芸術家における色彩や形態による動的イメージ創造の制作論的な特性を、有機体的植物と非生命的造形の接合地点で解明する可能性である。これが、あくまで美術の側から「その対象としての有機体的植物」を問い、そして解釈してきた従来の美術史のアプローチとは意図と方法を異にするのは、眼差すベクトルの転回それ自体が諸ディシプリンの接合地点、すなわち生命体=植物においてこそ可能となるからにほかならない。

3. 研究の方法

植物学、造園学、園芸史学等の立場から植物を主役とした庭園史の再構築に先導的な役割を果たすドイツ人研究者を研究協力者とし、申請者を中心にクロス・ディシプリナリーな国際的研究連携をはかった。とりわけ園芸植物やその植生に関する植物学的な専門知見は、申請者にとり、その領域の専門家の協力なくしては検証しえないことは明らかであり、彼らとの協力は本研究の前提でもあった。研究の遂行に当たり、当該研究者らとの信頼関係は、申請者が本務校助成によって 2015 年度に機会を得たベルリン・フンボルト大学への留学や、これまでに度重ねてきた諸アーカイヴでの一次資料調査に際する学際交流によって十分に培われており、申請者の研究関心に対する学術的評価と理解を獲得してきた経緯が生かされたと言える。

具体的な研究対象は、19 世紀後半にイギリスで起こり、やや遅れて伝播したドイツでも 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて広範に展開した「改革運動 Reformbewegung」の一環たる「改革庭園 Reformgarten」である。様式的には多様な側面をもつ「改革庭園」のなかでも、とりわけ、英国に発祥する「野生庭園 Wilde Garden」に示唆を得て 20 世紀に入りドイツで展開する、それ自体が植物の生物学的特性を重視した「自然庭園 Naturgarten」においては、その作り手である園芸植物栽培家・造園家の活動と、彼らと緊密な交流関係を築いた近代建築家の取り組みの重要性が注目された。本研究では、すでにドイツの研究者によって実証研究の進むアプローチ、すなわち植物の栽培・植栽・受容の実態を問う「植物利用」を基本原理とし、「基礎調査研究」と「3つのクロス・ディシプリナリー・プロジェクト(CdP)」を3カ年で実施する全体計画とした。このうち「基礎調査研究」には、「研究推進年(第1・2年度)」に実施する諸アーカイヴ所在の一次資料(造園活動に特有の図面類、植栽植物リスト等)調査、歴史的に重要な「自然庭園」の現地踏査、学際的研究会を位置づけ、一方、「3つの CdP」は各年度に1つを実施する計画とした。

4. 研究成果

20 世紀初頭のドイツで自然庭園を主導した多年生植物栽培家・造園家カール・フェルスター(Karl Foerster, 1874-1970)の活動を中核とし、大きく三つの成果に結実した。

第一に、フェルスターが第二次世界大戦直後の1948年から翌1949年にかけて手がけた、ヴァイマルのゲーテ荘園の庭修復に関する研究である。ゲーテが生きた18世紀以降の近代庭園史を視野に入れ、そこでの植栽デザイン的特性を実証的に解明することを目指した。基礎調査研究として、自ら生涯にわたり丹念なゲーテ研究に取り組んでいたフェルスターが遺したゲーテ関連一次資料の包括的な調査をベルリン州立図書館手稿コレクションにて実施する一方、修復事業当時に作成された造園専用図面類の調査をヴァイマル古典財団庭園保存部において実施し、これまで実証的に明らかにされていなかった修復プロジェクトの全貌をはじめて解明した。この成果は、学会（ゲーテ自然科学の集い）での2回の口頭発表のほか、論考「ドイツ近代造園とゲーテ -- ヴァイマルの「ゲーテ荘園の庭」修復（1948-49年）を中心に--」（日独二か国語版、2020年3月）にまとめた。

以上の基礎調査研究を踏まえ、庭園芸術学の立場から重視されたのは、フェルスターが構想した、具体的な多年生植物の植栽による庭園空間の色彩計画である。もとより彼はすでに1910年代より、ノーベル化学賞受賞科学者ヴィルヘルム・オストヴァルト(Wilhelm Ostwald, 1853-1932)の色彩理論に対する本質的関心を抱き、その後も晩年に至るまで継続して自然庭園を場とした園芸活動と植物の色彩問題を検討し続けた事実が判明している。庭園の植栽における色彩計画については、従来、慣習的に二次元平面図をもって検討されてきたが、環境的庭園空間の特性を動態性において把握する庭園芸術学の関心に基づくなら、庭園の色彩計画を近年のデジタル技術を駆使して動的に再現するというこれまでにない研究手法は、新たな視座の開拓に結びつくに違ひなく、本申請課題のCdPとしては完結をみなかったものの、デジタル人文学を素地とするドイツの専門家らとの意見交換を始めるところまできており、今後、具体的な実現に向け、研究を進展させる予定である。

第二に、本研究の主題である「庭園芸術学の構築」にとってその理論的基盤を形成するアスペクトである。すなわち、フェルスターと親交のあった近代建築家ペーター・ベーレンス (Peter Behrens, 1868-1940) による造園活動と庭園芸術理論を、19世紀末に登場する近代芸術学との関連において実証的に再考する取り組みであった。ベーレンスが1907年以降、生涯に6本発表した庭園芸術論をめぐっては、従来もつばら、19世紀末以降の建築理論における空間概念論の文脈で把握されてきた。しかし各論考の丹念な精査に加え、フェルスターをはじめとする同時代の改革庭園を主導した園芸専門家とベーレンスとの緊密な交流を一次資料調査に基づき実証的に解明する作業を通して、先行研究によっては等閑に付されてきたものの、実はベーレンスの庭園芸術論がほかならぬ「植物の成長」を核とする独自の空間-時間的空間形成論であること、そしてその構想の基盤をなすのがほかならぬ19世紀末の芸術学である事実を明らかにした。この研究成果は、「ヴァイマル・バウハウスと庭園芸術 -- ハイritz・ヴィヒマンによる改革の試み」（『美学』257号、2020年12月）の一部、ならびに「ペーター・ベーレンスにおける「生長 (Wachstum)」概念 -- 一九二〇年代以後の庭園芸術論を再考する --」（『芸術学』24号、2020年3月）としてまとめた。なお、この主題に関しては、近代芸術学との関係をさらに丹念に精査する必要があり、今後も継続課題とする予定である。

そして第三に、20世紀初頭から1920年代にかけて「自然庭園」が展開するなか、上述の建築家ベーレンスと、多年生植物栽培家・造園家フェルスター双方の周辺で活動した造園家ハイritz・ヴィヒマン (Heinz Wichmann, 1898-1962) の、1920年代前半における実験的造形デザイン学校バウハウスでの活動に着目することを通じて、庭園芸術学の20世紀モダニズムへの接続について検討した。これに関して、論考「ヴァイマル・バウハウスと庭園芸術 -- ハイritz・ヴ

イヒマンによる改革の試み」(『美学』257号、2020年12月)を発表した。

以上、三つの具体的アスペクトの検討によって、19世紀末から20世紀前半にかけての改革庭園の展開を背景として、庭園芸術研究の新たな領域として「庭園芸術学」を提唱する妥当性と必然性を実証することに成功した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 後藤文子	4. 巻 29
2. 論文標題 「庭園芸術学的視座における「造園」概念の再考」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『Booklet』[特集：モルフ/アモルフ 「場」をめぐるイメージ論]	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤文子	4. 巻 24
2. 論文標題 「ペーター・ペーレンスにおける「生長（Wachstum）」概念 一九二〇年代以後の庭園芸術論を再考する」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『芸術学』	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤文子	4. 巻 257
2. 論文標題 「ヴァイマル・パウハウスと庭園芸術 ハイント・ヴィヒマンによる改革の試み」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『美学』	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤文子	4. 巻 70-2（通号255）
2. 論文標題 「ヴァイマル・パウハウスと庭園芸術」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『美学』	6. 最初と最後の頁 125-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 後藤文子	4. 巻 25
2. 論文標題 「近代庭園の自然主義 二人の造園家、七代目小川治兵衛とカール・フェルスター」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『慶應義塾大学 アート・センター年報 / 研究紀要 (2017/18)』	6. 最初と最後の頁 94-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 後藤文子	4. 巻 1
2. 論文標題 「近代デザインにおける「統合」と「規格」: タイポグラフィから建築、そして庭園へ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『DNP文化振興財団学術研究助成紀要』	6. 最初と最後の頁 82-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 後藤文子
2. 発表標題 「ヴァイマル・パウハウスと庭園芸術」
3. 学会等名 第70回美学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤文子
2. 発表標題 「ドイツ近代造園とゲート 植物のすがた」
3. 学会等名 第51回ゲート自然科学の集い「シンポジウム」(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 監修:酒井邦嘉、共著者:安藤礼二、岡田憲久、岡本拓司、酒井邦嘉、曾我大介、後藤文子、田中純、外山紀久子、前田富士男、前野隆司、正木晃	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 -
3. 書名 『科学と芸術』	

1. 著者名 後藤文子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明文出版	5. 総ページ数 68
3. 書名 『ドイツ近代造園とゲーテ ヴァイマルの「ゲーテ荘園の庭」修復(1948-49年)を中心に Moderne deutsche Gartenkunst und Goethe. Zur Restaurierung von Goethes Gartenhaus in Weimar (1948/49)』(日独二か国語版)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ヴィンマー クレメンス・アレクサンダー (Wimmer Clemens Alexander)		
研究協力者	シュナイダー アンゲリカ (Schneider Angelika)		
研究協力者	ラウターバッハ イリス (Lauterbach Iris)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ドゥートゥヴァイラー シュヴァン ティエ (Duthweiler Swantje)		
研究協力者	デュンペルマン ソニア (Duempelmann Sonja)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ヴァイマル古典財団庭園保存部 門	ベルリン工科大学附属ドイツ園 芸学図書館	ミュンヘン中央美術史研究所	他2機関